

おいしいイチゴを届けよう 春イチゴ出荷目ぞろえ会



▲出荷規格を確認する生産者

春イチゴの「おとめ心」と「紅ほっぺ」の本格的な出荷を前に、出荷規格目ぞろえ会が4月23日、JA酒田南園芸センターで開かれ、生産者10人が参加しました。今年も真っ赤に実ったイチゴを前に、JAの担当者が出荷規格を説明。栽培管理については「急な温度変化にいかに対応できるかがポイント。気象情報をファックスで伝える」と注意を促しました。「市場の品質評価は高く、ゴールデンウィークに向けてまとまった数のイチゴがほしい」と要望も紹介。

今年度13人の生産者が79aで栽培。収穫は6月上旬まで続き、県内市場向けに5万パック(1パック260g)、13トンの出荷を見込んでいます。

育苗巡回～おおむね順調に生育～ 温度管理の徹底を



▲出芽や根張りなどを確認する営農指導員(右から3人目)と生産者

管内7つの営農課は、4月中旬から各地区で営農指導員による育苗巡回を行いました。

4月23日には、中平田の大野新田で「はえぬき」を中心に、「つや姫」と今年産から「雪若丸」を作付けする生産者の育苗ハウスを巡回し、出芽や葉齢、根張りなどを確認しました。

指導員は「おおむね順調に生育している。播種は4月7～10日と13～15日に分かれたが、差は大きく見受けられなかった。仙台気象台の1カ月予報(4月12日発表)では、平年に比べ気温が高い見込みで、急な日照による過高温には遮光資材を活用し温度管理に細心の注意を」と育苗育成に向け、アドバイスしていました。

スマホでハウスの温度確認

杉山光永さん(刈屋)が装置開発に取り組む



▲装置を設置している小野さん(左)の育苗ハウスで性能を説明する杉山さん

ハウスの温度をパソコンやスマートフォンに送信する装置を杉山光永さん(刈屋)が開発・試験運転しています。この装置は温度計と水位計を搭載しており、5分～6分おきに測定データをLTE通信でサーバーに送り、指定のURLにアクセスするとパソコンやスマートフォンで測定データを確認できるというもの。電源は単一乾電池4本で、携帯電話がつかない場所であれば稼働できます。現在、小野貴之さん(庭田)の育苗ハウスで試験運転しています。「作業が重なる時期に、有用な装置。温度データが取れるのも作柄研究に役立つ」と小野さん。今後は耐久性や防水性の課題を克服し、実用化につなげたいとのこと。